

(コース) 5 km

JR掖上駅 — <sup>37</sup>齊明天皇陵 — 郡界橋 — 嘘間神社 —  
神武天皇社 — 須賀神社 — 茅原吉祥草寺 —

JR玉手駅…解散

( 総 説 )

アメリカの浦島太郎として名高い文豪、アービングの小説『リップ・バン・ウインクル』の書き出しの明文、キヤッキル山脈の描写そのままに、薄紫に映え渡る葛城の聖山を、朝に夕べに仰ぎ見るここ「掖上」は、太古から海洋族尾張氏が、次いで出雲系の雄加茂（鴨）氏一族が、さらには葛城氏と、中央大豪族が次々と蟠踞し、我が国建国にも関わる古代史発祥の地であった。

神ながらの呪術たゞよう掖上は、<sup>42</sup>文武天皇の大宝元年、大化の改新による<sup>38</sup>天智・<sup>40</sup>天武帝の理想「律令政治」がようやく緒につき大宝律令が發布されたが、この新体制に背をむけて、この地を中心に、呪術をもって世に問わんとした「役行者」生誕の地もまた、ここ掖上だったことは、この地の性格が偲ばれて興味尽きない。

( 各 説 )

【<sup>37</sup>齊明天皇<sup>おち</sup>越智<sup>おかのへ</sup>岡上陵】 高取町大字車木

<sup>34</sup>叙明天皇の皇后宝皇女は、天皇崩御の後即位して天位に就かれた。<sup>35</sup>皇極天皇である(642)。かの有名な大化のクーデターは皇極4年(645)のことであった。女帝は<sup>38</sup>天智、<sup>40</sup>天武の実の母でもあった。

大化のクーデターの後、一旦は退位されたが、実弟の

古代史散策

No. 47

わ き が み  
掖 上 ①

パナソニック電工松寿会  
同好会 古代史散策部

昭和62年6月作成  
平成27年10月四刻

<sup>36</sup>孝徳天皇崩御の後、再び即位して<sup>37</sup>齊明天皇となり、激動の600年中期に、皇太子中大兄の後ろ盾となって、一旦滅亡した百済の復興運動を助けるべく筑紫の朝倉宮に幸されたが、その地で崩じられた(661-667)。

<sup>35</sup>皇極<sup>37</sup>齊明天皇の御世は、天皇家の存亡に係わるまさに激動の世であった。内には蘇我入鹿が権勢をほしいままにし、天皇の位を乗っ取らんばかりであり、蝦夷は度々反乱し、<sup>しよくしん</sup>肅慎が我国の北辺を侵し、外では<sup>しんろ</sup>新羅が唐と謀って盟邦百済を滅ぼさんとし、さらに新羅・唐の連合軍が我が国を攻撃しかねまじき動きを見せていたからである。

齊明2年(656)飛鳥<sup>たののね</sup>の田身峰に「<sup>ふたつき</sup>双槻の宮」を築く。おそらく皇太子中大兄企画による、百済救援の準備のための山城構築ではなかったかと思うがどうだろうか。構築用石材の運搬のため、<sup>いそのかみ</sup>石上から香具山まで濠が掘られたが、これらは皆数万人の民を徴して行われたから、人民は重税に苦しみ、その不満は総べて齊明天皇に向けられた。日本書紀齊明天皇2年9月の条に云う「時の人誇りて曰く<sup>たぶれこころのみぞ</sup>「<sup>ひとちから</sup>狂心の渠」<sup>ひとちから</sup>功夫を費やすこと3万余、垣造る功夫をを費やすこと7万余、云々」女帝は人民のそしりを一身に受けとめ、わが子皇太子中大兄をかばわれたのであろうか。その辺の事情は書紀に何の記載もなく、真実を知る手掛かりはない。

女帝の皇孫「建皇子」はものの言えない障害者であったから不憫だったに相違なく、殊の外寵愛せられたが、齊明4年(658)5月紀、御歳8才にして夭逝。群臣に詔して「万歳千秋の後に必ず朕が陵に合わせ葬れ」と曰わり、作歌して「時々唄いたまいて悲哭す」とある。

\*今城なる<sup>いさき</sup>小丘が上に<sup>おわれ</sup>雲だにも

著くし立たば 何か嘆かん  
 \*射ゆ<sup>し</sup>鹿猪と<sup>つな</sup>認ぐ川上の 若草の  
 若くありきと 吾が思はなくに  
 \*飛鳥川<sup>うなぎ</sup>漲らひつつ 行く水の  
 間も無くも 思はゆるかな

<sup>おち</sup>越智岡は真弓丘陵に続く西端の岡、陵を一周すれば葛城山の全容と山麓の高原を一望できる。改葬前の最初の墳墓は不明で、<sup>ゆかりんこ</sup>真弓牽牛子塚や岩屋山古墳を当てる説があるが、推定の範囲を出るにはいたらない。

陵の中腹に女帝の皇孫で建皇子の長姉太田皇女の墓がある。太田皇女は<sup>41</sup>持統天皇(鶺野皇女)の姉で、大泊皇女・大津皇子の母君であった。

【郡界橋】

古代の高市郡と葛城郡の郡境の曾我川に架けられた橋である。右岸に沿って通ずる古道がかったの南海道で、つらつら<sup>みなと</sup>椿の巨勢を経て吉野川右岸を下り、紀の水門に到った。この辺りの字名を『柏原』と云う。

【<sup>はは</sup>嘘間神社】

御所市大字<sup>かしはら</sup>柏原

それと知らねば見逃す小社が、民家の扉に挟まれて、置き忘れたようにひっそりと建つ。境内の大木は、おそらく神の降臨する「ひもろぎ」であろうか。

近くに「本馬山」「大字本馬」の地名が、<sup>1</sup>神武天皇国見の「嘘間の丘」だとわかるのは、この神社が残っていたお蔭であった。

【<sup>じんむ</sup>神武天皇社】

御所市大字<sup>かしはら</sup>柏原

神武天皇即位の地は、古事記は「<sup>うねび</sup>畝火の<sup>かしはら</sup>白袴原の宮」

日本書紀は「榎原宮に即位す」とあり、現在の榎原神宮の辺りに比定され、疑いを持つ人はなかった。しかるに徳川時代には、畝傍山の名も榎原の小字すら消滅した。明治になって欧米の実証主義が学問の主流となり、神武即位の地を疑問視する学者が現れた。<sup>8</sup>孝元天皇（<sup>9</sup>開化天皇は、記は「春日の伊邪川の宮」、紀は「春日率川卒宮」）までの天皇が、神武を除き葛城とその周辺に宮居を定めたとし、独り神武天皇の宮居をやや離れた「榎原」とすることには、一抹の疑問を指し挟まざるを得ない。掖上のこの地は「柏原」であり、天皇国見の地 鎌間山は、記・紀の伝承を信ずるかぎり、まず此処に間違いはないであろうから、「この地が神武即位の地」との推定は成立するのではあるまいか。

鎌間神社、神武天皇社がよくぞ残っていたものである。

【須賀神社】

御所市大字本馬

古事記上つ巻神代記に。

（須佐の男の命が八俣大蛇を退治ての後に）

かれここを以ちて須佐の男の命、宮造る地を出雲の国に求めたまいき。ここに須賀の地に到りまして、詔たまわく「吾此地に来てわが御心清浄し」と詔り給まいて、そこに宮作りましき。故にそこをば今に須賀と云うと。この時詠まれた歌は、古事記歌謡の1番として名高い。

八雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに

八重垣作る その八重垣を 歌謡 #1

【茅原吉祥草寺】

御所市大字茅原

正式名は茅原山金剛寿院吉祥草寺（本山修験宗大本山）で旧茅原村の古寺。建立は<sup>34</sup>舒明天皇の御世(629-641)

と伝えるが真偽は不明。別名茅原寺。

修験道の開祖と云われた役行者は、名を小角と云い、加茂氏の出とある。小角は生まれながらにして呪術の血を受け継いでいたのであったが、葛城山に籠って鬼術を会得したと云う。※小角、舒明6年(661)生、没年不明。

修験道は仏教の一派だが我国固有の山岳信仰に根ざし、その面影を色濃く残して密教・道教と習合した。

外従五位下韓国連広足は、始め小角に師事して呪術を学んだが、後に師の能力を妬み讒して伊豆に流した。

続日本紀<sup>42</sup>文武天皇3年(699)5月丁丑(24日)の条に

「役の君小角、伊豆の嶋に流さる。初め小角、葛木山に住み妖術を以て称わせられる。外従五位下韓国連広足、師とす。後その能を妬み、讒するに妖感を以てし、故に遠所に配さる。世相伝えて云う、小角よく鬼神を役使して水を汲み薪を採らしむ。もし命を用いざれば即ち呪を以て之を縛る」とある。

699年と云えば、律令体制が完成した大宝元年の2年前であり、時の政府の意向に反した旧い呪術による役の行者の言行を、反体制者としての処分であった。大宝律令制定の責任者であった藤原不比等あたりの画策ではなかったろうか。政府はまず小角の母を捕らえて監禁し、その母を救わんと出頭したところを捕らえられてしまったのである。伊豆に流された小角は、空を飛んでいずれかに飛び去ったとある。おそらく百濟、高句麗に亡命したのではなかったか。朝鮮には現在でも役の行者の伝承が残っている。

茅原には、役行者にまつわる遺蹟が点在し、土地の古さを偲ばせる。

